「杜家立成雑書要略」への王羲之書法の影響

—「蘭亭序」「喪乱帖」「孔侍中帖」における「之」字との比較から—

小林比出代

はじめに

本論考は、拙稿(1)に基づき、「杜家立成雑書要略」(2)の書法における王羲之書法からの影響を、「杜家立成」と「蘭亭序」「喪乱帖」「孔侍中帖」の「之」字に注視比較して検証するものである。

拙稿(1)では、「杜家立成」における王羲之書法の影響を分析検証する第一段階として、「杜家立成」第一紙(3)における書法の特徴を、王羲之筆「楽毅論」の臨書作品である光明皇后筆「楽毅論」との共通性から検討考察した。本論考を展開するにあたって、拙稿(1)にて論じた「杜家立成」を包括的に概説した知見及び文献での記述の一例を示した上で、稿者が当該の論考を執筆するに至った趣旨(4)を再掲する。

「杜家立成」の書儀としての特徴等に関しては、内藤虎次郎（湖南）「正倉院尊蔵二舊鈔本に就きて」（一九二二）を初めとして、今日まで諸文献(5)で論じられてきている。当該論文での見解や論議をふまえて、「杜家立成」を包括的に概説した知見(6)を以下に引用する。

「「知故」すなわち友人間で取り交わされる手紙の模範文例集で、三六件七二通の往復書簡の文例を収めている。著者は都の杜氏の出身のもので、説がわかれているが、杜正倫またはその兄の杜正蔵と推定されている。本書は中国ではすでに散失し、伝存しないものの、わが国の東大寺正倉院に正倉院宝物として伝わる一本が現存する唯一のものである。」

一方、「杜家立成」は書の名品ともされている。文献での記述の一例(7)を示す。

「（「杜家立成」は、稿者注）臨書の楽毅論と相並んで皇后の御書としてのみならず、奈良時代の書道の代表的名蹟と稱してよいであろう。」

このように、書作品としての「杜家立成」は、「正倉院の書蹟中の白眉と称してよい」(8)とされる「楽毅論」と並び称されてきている。しかし、実際のところ、現代における「杜家立成」の書作品としての評価は、「楽毅論」の陰に隠れてしまう感が否めない。〔中略〕

このように、「杜家立成」の書の手本としての可能性を模索することによって、稿者は「杜家立成」の書作品としての魅力を改めて講究したいと考えるに至った。

次に、拙稿(1)にまとめた先行研究からの「杜家立成」の概説(9)を要点のみ列記する。

○「杜家立成」は光明皇后の書蹟であり、書体や書風が中程で変化する。
○「杜家立成」第一紙と光明皇后筆「楽毅論」には類似性が存する。
○「杜家立成」及び奈良朝における王羲之書法の影響は大きい。

続いて、拙稿(1)では、先行研究(10)を基に、光明皇后筆「楽毅論」の書法上の特徴を具体的に列挙し、「杜家立成」第一紙に書写された考察対象文字二一一字と比較検証した。その結果を受け、「杜家立成」における王羲之書法の影響について、第一紙に焦点を絞り考察した内容(11)を再掲する。

光明皇后筆「楽毅論」は王羲之筆「楽毅論」の忠実な臨書作品とされる(12)。〔中略〕一方、見方を転換すれば、光明皇后は、当時の日本の

社会に王羲之書法が広がることの一端を担ったと捉えることができる。奈良時代における王羲之書法の伝播は、光明皇后の王書への心服が相俟ったものと推察される。

光明皇后が王書を学び、王羲之書法の影響を受けていた証左は、「蘭亭序」と「杜家立成」第一紙の同文字（もしくは類似文字）の比較（【資料2】参照（拙稿(1)での書式を変更し掲載 稿者注））からも認められる。

【資料2】「蘭亭序」［※右］と「杜家立成」第一紙［※左］の同一（もしくは類似）文字の比較

「杜家立成」第一紙は楷書を主とするが、【資料2】に示す通り、行書作品「蘭亭序」における同一の（もしくは類似する）文字との間に、字形及び筆法における共通点が存在する。本論考では光明皇后が「蘭亭序」を学んだか否かについて論証はしないが、皇后が「蘭亭序」を臨書していないにもかかわらず「杜家立成」に上記（本稿では右記 稿者注）の共通性を有していたならば、このこと自身が光明皇后書法への王羲之書法の浸透を示すものと考えられる。〔中略〕

本論考での検証考察から、「杜家立成」第一紙と光明皇后筆「楽毅論」は書法上の特徴を同じくし、また、「杜家立成」第一紙の書法の源流には王羲之書法があると推考できる。

当該稿では、「今後の課題」として、「今後は、「杜家立成」第一紙以降の書法について、同じく王羲之書法からの影響を検証する。」(13)と記した。

本論考では、既述の課題に則り、「杜家立成」第一紙も含めた「杜家立成」全文（全四一七八字）から「之」字（全三七字）を抽出し、王羲之による「之」字、具体的には、「蘭亭序」での「之」字（全二〇字）、「喪乱帖」での「之」字（全五字）、「孔侍中帖」での「之」字（全二字）の、全文字と比較して、「杜家立成」全体への王羲之書法の影響の一端について考察する。

一 「杜家立成」と「蘭亭序」における「之」字

「杜家立成」全四一七八字（第一紙二一一字 第二紙～三九六七字）の全てにわたる考査を試みた結果、最も多く用いられていたのは、「不」字の六三字（第一紙三字 第二紙～六〇字）であった。次に、「無」字の六一字となり、「不」「無」二字の出現率は群を抜いて高いことがわかる。続いて、「書」「故」「知」、そして、「之」の順となる。「之」字の総字数は三七字（全体比〇・九％）、第一紙に三字、第二紙以降に三四字存在する。

「一」で再掲した拙稿(1)での、「蘭亭序」と「杜家立成」第一紙の同文字を比較した【資料2】には、「蘭亭序」と「杜家立成」での字形及び筆法における共通点を示す一例に「之」字を掲げた。「之」字は、先述の通り、「杜家立成」において用いられる順位が高い文字である一方、「蘭亭序」における、いわゆる二十態でも有名な文字である。例えば、二〇〇八（平成二〇）年八月二四日放送のNHK教育「新日曜美術館 書に万感の思いあり 王羲之『蘭亭序』」においても、全文二八行、三二四字中、二〇回使用の最多文字「之」字は、悉く変化して一字として同じものがないと指摘された。この事実を立証する先行研究での記述を抜粋する。

○「各々の字勢は縦横に変化し、花の乱れ飛ぶがごとく、左に転じ右に側ぶくが一つとしてあい抵触することがない。あたかも糸を以て珠をつないだごとく、大小参差として、しかもその重心を失なわない。そのうち「之」「以」「也」「為」などの字は二十いくつもあるが、みんな違う形に書かれ、芸術的な多様と統一が実現されているのである。」(14)

○「たとえば蘭亭叙の様式をいうとき、何延之『蘭亭序』のいう「重なる字があると、ともに別体に構えている。之の字がもっとも多く、二十箇あるが、変転ことごとく異なっていて、同じ構えは一つもない」が引き合いに出される。〔中略〕全文三二四字中、二回以上重出している字は四五例ある。〔中略〕その構えはもとより、強弱、大小まことに変化多端である。しかも、それぞれが全幅の中にしっくり納まって、不自然さはみられない。こうした面から把えても、蘭亭叙の劇跡たる書道史的位置はゆるがないであろう。」(15)

○「同一文字の変化（之は二〇字出てくるが全て形が違う）」「〈之〉〔中略〕など頻出の文字のすべてが、自然に文字を承けたごく当たり前の姿として跡づけられ形を変えて、観る者を楽しませてくれます。」(16)

○「かりに蘭亭序の原蹟が偽托であったとしましても、蘭亭序――例えば①（「八柱第一本（張金界奴本）」稿者注）・③（「八柱第三本（神龍半印本（馮承素本））」稿者注）など――の真価が無にはなりません。例えばその変化の多端さを、つとに唐の何延之は、二〇字ある「之」字に同じ結構が一つもないと指摘していますが、また二度以上用いた字が四五例もあるのに、その構えはもちろんのこと、強弱・大小がごく自然に、全幅の中へしっくりと納まるその章法を衝く非凡な感覚、あるいは確かな骨格とめりはりのある用筆――、これらは東晋以前にはない画期的な書法です。蘭亭序が劇蹟であるとする書の歴史的評価は、なおゆるがないでしょう。」(17)

○「同じ字が二回以上現れる場合は、すべて形を変えて書かれている。たとえば全部で二〇回使われている之の字がそうである。」(18)

本論考では、既述のように、「杜家立成」において用いられる頻度が高く、かつ、「蘭亭序」において最も多く使用され、さらには、拙稿(1)において、「杜家立成」第一紙と「蘭亭序」での字形及び筆法に関する共通点が認められた「之」字を比較対象文字に挙げることとする。

二　「杜家立成」と「喪乱帖」及び「孔侍中帖」

前章では、拙稿(1)の、「「杜家立成」は、「蘭亭序」における同一の、もしくは類似する文字との間に、字形及び筆法に関して共通点を有する」との論証に基づき、「杜家立成」と「蘭亭序」の中から「之」字を抽出比較する理由を述べた。

一方、拙稿(1)では、先行研究にて、「杜家立成」の書体や書風が中程で変化すると指摘される点についても記した。具体的な記載を列挙する。

○「この書巻も王羲之の尺牘、ことに御物の喪亂帖に見るごとき筆意が十分にうかがわれることは見逃せぬことである。〔中略〕第一紙はほとんど樂毅論と變りはないが、第二紙からは筆勢が暢達してさらに圓熟し、最後の一紙〔中略〕の部分に到って、もっとも秀抜の極致に達しているように見られる。」(19)

○「〔前略〕初めは行書で中ほどから独草体風を交えて書写されており」(20)

○「〔前略〕はじめはかなり整然とした行書体、中ほどからは書写を急いだ風でやや乱雑な独草体の書風となったものと思われる。」(21)

○「第一紙は「樂毅論」と同じように楷書であり、やや硬さが見られる。しかし、それはほんの一部であり、第二篇の終焉辺りから肩の力が抜けた行書になっていく。筆の性質を十分熟知した上での、線の肥痩による書表現は見事の一言に尽きる。途中行間が狭く、字粒が細かくなる箇所があるものの、巻末は紙面余白の関係からか、終焉が近づいたという心のゆとりからか、おおらかな雰囲気で書かれているのも見逃せない。ただ残念なことに、巻末には微細な傷みがあり、文字が部分的に欠損している。通覧した時には、さして問題にはなるまい。このように一巻を通して起承転結があり、鑑賞するもの、学書するものを飽きさせない。」(22)

○「光明皇后の書道史的名品としては「樂毅論」がよく知られ、日本の書道史の初期の楷書の代表作とされる。そしてこの『杜家立成雑書要略』を比較してみると、はじめの一、二葉は、ほとんど同じ楷書の筆致である。三葉あたりから崩されて草書になって行く〔以下略〕」(23)

○「〔前略〕光明皇后筆の『杜家立成雑書要略』の書き方を見て行くと、書き始めはともかくも、三葉以後、崩されて草書の書き方になってゆき、興に載ったような書き方をしている。」(24)

○「書體は、初めの方にとりわけ顯著なのだが、行書、ただし後の部分には草書も交える。」(25)

○「〔前略〕丁寧な行書體で書き始め、後にゆくほど草書風に變化する〔以下略〕」(26)

○「第一紙は「樂毅論」に似た書きぶりであるが、第二紙以降、やわらかさが加味された行書になり、書き進むにつれて気持ちの高揚感が書線に現れてくる。特に巻末に至っては圧巻というほかない。」(27)

先行研究におけるこのような考察に基づくと、「杜家立成」の字形や書法の

分析には、第一紙と第一紙以降での書法や書風の違いを勘案し、比較対象とする作品に関しても熟考する必要があると判断する。

先述の注(19)には、「この書巻(＝「杜家立成」稿者注)も王羲之の尺牘、ことに御物の喪亂帖に見るごとき筆意が十分にうかがわれる」と記述される。また、「杜家立成一巻はかの有名な樂毅論とゝもに光明皇后の御書である。東大寺獻物帳には次の如くに載せてゐる。

頭陀寺碑文並杜家立成一巻　麻紙紫檀軸褾綺帶
樂毅論一巻　白麻紙瑪瑙軸紫紙褾綺帶

右二巻平城宮御宇皇太后御書」(28)

と考証される一方で、「喪乱帖」も「杜家立成」と同じく御物である。これら二点に基づき、本論考では、「蘭亭序」とともに「喪乱帖」を比較対象の作品とする。

さらには、「王羲之の間然とするところのない書境は、②～⑤(＝②「喪乱帖」③「孔侍中帖」④「寒切帖」⑤「遠宦帖」稿者注)に象徴されており、いわゆる〝王法〟の特質を随所に示している。」(29)と論じられる中、「現在、王羲之の書といわれる遺品の中で、実際に書かれた本物、いわゆる真筆は一点も存在していないのであるが、この二点(＝「喪乱帖」「孔侍中帖」稿者注)は、羲之の書の真髄を伝える代表的な遺品として絶大な評価を得ているものである」(30)点、加えて、「孔侍中帖」が『東大寺献物帖』に記された御物の一つ」(31)であって、かつ、「奈良時代にわが国に舶載されたいわゆる「書法廿巻」中の一巻と推定されるもの、神彩奕々としてあだかも肉筆を観るがごとく、「喪乱帖」とともに王右軍の真面をうかがう有力な資料として極めて尊重される」(32)と評されるように、「喪乱帖」とともに王羲之書法を伝える貴重な作品に意義づけられる点に鑑みて、「孔侍中帖」も併せて比較対象の作品とする。従って、本論考では、「杜家立成」との比較作品に、「蘭亭序」と併せて「喪乱帖」及び「孔侍中帖」を掲げ、「蘭亭序」と同様に、「喪乱帖」「孔侍中帖」の中からも「之」字を抽出し比較することとする。

「喪乱帖」及び「孔侍中帖」の全文字を考査した結果、「喪乱帖」における「之」字は五字(「喪乱帖」に三字、「二謝帖」「得示帖」に各一字)、「孔侍中帖」における「之」字は二字(「孔侍中帖」「憂懸帖」に各一字)であった。

三　「杜家立成」と「蘭亭序」「喪乱帖」「孔侍中帖」における「之」字一覧及び比較考察

本章では、「杜家立成」と「蘭亭序」「喪乱帖」「孔侍中帖」における「之」字を表にして提示し、当該文字の比較検証を試みる。

はじめに、「杜家立成」全四一七八字中の「之」字、全三七字の一覧を「**表1**」として呈する。

次に、「蘭亭序」の「之」字、全二〇字の一覧を「**表2**」に示す。「蘭亭序」「之」字のスキャンには神龍半印本を用いた。これは、「今日、書を習う立場からあげると、(1)「張金界奴本」(八柱第一本)、(2)「神龍半印本」(八柱第三本)、(3)「定武本」の三種類が特にすぐれる。」(33)「(「神龍半印本」は、稿者注)摹写がもっとも真に逼っている」(34)と評される点に拠る。

続いて、「喪乱帖」の「之」字、全五字、及び「孔侍中帖」の「之」字、全二字を、同一の表にまとめ「**表3**」として掲げる。

これらを受けて、「**表1**」に提示した「之」字を、「**表2**」及び「**表3**」に提示した「之」字における王羲之書法の具体的な特徴に関して検証考察した先行研究に基づき分析する。なお、「**表4**」から「**表8**」の各表中に記す%値は、当該表の冒頭部に記載する、「之」字に関しての王羲之書法の特徴を有する「之」字が、「蘭亭序」と「杜家立成」の各作品に何字存するかを示す、各作品の「之」字総字数に対しての割合である(蘭＝「蘭亭序」　杜＝「杜家立成」の略記)。「喪乱帖」「孔侍中帖」の%値に関しては、「喪乱帖」「孔侍中帖」それぞれにおける「之」字の字数自体が寡少であるため算出しない。

⑨ 6 L 52	⑧ 5 L 41	⑦ 4 L 38	⑥ 4 L 32(2)	⑤ 4 L 32(1)	④ 3 L 23	③第一紙 2 L 16	②第一紙 2 L 15	①第一紙 1 L 8	順番 書簡数 行数
									該当文字
⑲ 26 L 242	⑱ 22 L 203	⑰ 22 L 199	⑯ 21 L 195	⑮ 20 L 183	⑭ 19 L 171	⑬ 17 L 146	⑫ 9 L 73	⑪ 8 L 70	⑩ 6 L 53
㉙ 35 L 311	㉘ 34 L 302(2)	㉗ 34 L 302(1)	㉖ 34 L 300	㉕ 32 L 285	㉔ 32 L 284	㉓ 32 L 281(2)	㉒ 32 L 281(1)	㉑ 31 L 276	⑳ 31 L 273

表1「杜家立成雑書要略」の「之」
（第一紙　3字
第二紙～ 34字
合計 37字）

㊲ 36 L 327(2)	㊱ 36 L 327(1)	㉟ 36 L 326	㉞ 36 L 323	㉝ 36 L 322	㉜ 36 L 318	㉛ 36 L 317	㉚ 35 L 312

表2「蘭亭序」の「之」（二〇字）

5 L 9(2)	4 L 9(1)	3 L 6	2 L 2	1 L 1	順番 行数
					該当文字
10 L 16(1)	9 L 13	8 L 12	7 L 11	6 L 10	順番 行数
					該当文字
15 L 19	14 L 18	13 L 17(2)	12 L 17(1)	11 L 16(2)	順番 行数
					該当文字
20 L 27	19 L 25	18 L 24	17 L 23	16 L 21	順番 行数
					該当文字

順番 行数	[1] L1(1)	[2] L1(2)	[3] L8	[4] L2	[5] L4
該当文字					

表3

上段：「喪乱帖」の「之」（5字）

下段：「孔侍中帖」の「之」（2字）

順番 行数	〈1〉 L1	〈2〉 L2
該当文字		

順番 行数	[1] L1(1)	[2] L1(2)	[3] L8	[4] L2	[5] L4
抽出作品名	喪乱帖 （喪乱帖）	喪乱帖 （喪乱帖）	喪乱帖 （喪乱帖）	喪乱帖 （二謝帖）	喪乱帖 （得示帖）

表3資料

上段：「喪乱帖」の「之」抽出作品名

下段：「孔侍中帖」の「之」抽出作品名

順番 行数	〈1〉 L1	〈2〉 L2
抽出作品名	孔侍中帖 （孔侍中帖）	孔侍中帖 （憂懸帖）

表4

【蘭亭序】「点法（点の筆法）」［斜点「之」］

○「順鋒で右下に向って筆をおしつけ、かすかに筆をあげながら、左上方に向ってかるくぬく。」(35)

→ 蘭 35.0% 杜 16.2%

蘭14

【蘭亭序】「点法（点の筆法）」［出鋒点「之」］

○「筆の入れ方は右（＝［斜点「之」］稿者注）と同じで、末端は鋒先を出すが、あまり長く挑ねてはいけない。」(35)

→ 蘭 25.0% 杜 5.4%

蘭16

蘭3	杜⑤	蘭5	杜⑦	蘭10	杜⑧	蘭11	杜⑯	蘭17	杜㉓	蘭18	杜㊱

蘭2	杜㉚	蘭4	杜㉝	蘭6	蘭15	喪[1]	喪[3]

「蘭亭序」「之」字の「点法（点の筆法）」に関しては、「**表4**」右側「蘭14」のように、「斜点」、すなわち、露鋒にて右下に向かって筆を収めた後、自然に筆を持ち上げ（筆圧を弱め）ながら、左上方に向かって軽く抜く筆法と、「**表4**」左側「蘭16」のように、「出鋒点」、すなわち、筆を紙に向かって下ろす際の用筆は「斜点」と同じだが、収筆の際に鋒先を明確に出し、かつそれほど長くは挑ねない筆法が存在する。

「出鋒点」は「喪乱帖」にも見受けられる。「杜家立成」においては、割合はそれほど高くないが、「斜点」も「出鋒点」も双方ともに出現しているのがわかる。

表5

【孔侍中帖】「之」字　点の筆法　→ 蘭 15.0％　杜 48.6％

○「（表3の〈1〉は〈2〉と比較して」稿者注）点画のつながりもあまりなく、（「〈2〉は」稿者注）一画一画が行書ではあるが一つ目の「之」（＝〈1〉稿者注）とは異なる行書である。一方で、後半の「之」（＝〈2〉稿者注）は一画目と二画目のつながりの線があり、二画目の中にも筆の浮き沈みが前半の「之」（＝〈1〉稿者注）よりもはっきりとみられる。」(37)　※強調部稿者

孔〈2〉

蘭7	杜①	杜⑫	杜㉖
蘭16	杜②	杜⑭	杜㉙
蘭20	杜③	杜⑮	杜㉛
	杜④	杜⑰	杜㉜
	杜⑤	杜⑳	
	杜⑨	杜㉒	
	杜⑪	杜㉔	

一方、「孔侍中帖」の「之」字に関しては、「孔〈1〉」を「孔〈2〉」と比較した際、「孔〈1〉」は点画間のつながりが視覚的にはさほど認知できず、「孔〈2〉」とは異なる書きぶりである点が示唆される。「孔〈2〉」は、「表5」に示されるように、一画めと二画めとの間に連続線を有し、二画めにおける筆の浮沈も「孔〈1〉」に比べて豊かである。

「孔〈2〉」一画めと同種の筆法は、「蘭亭序」にも存在する。「杜家立成」に至っては、本筆法が「之」字全体の約半分の割合を占める。

また、「表6」から明らかなように、「蘭亭序」と「杜家立成」には、一画めと二画めが直接に連続はしないものの、一画めから二画めに向かって細い筆脈が出る筆法や、「蘭12」のように、点を上に抜く筆法も存在する。

表6

【蘭亭序】「之」字　点の筆法　→ 蘭 25.0％　杜 18.9％

○一画めから二画めに向かって細い筆脈が出る。（一画めと二画めは直接には連続しない）

蘭2

【喪乱帖】「之」字　点の筆法　→ 蘭 0％　杜 2.7％

○一画めから二画めに向かって実線化した太い筆脈でつながる。

喪［4］

蘭4	杜⑦	杜㊲
蘭6	杜⑧	
蘭13	杜㉑	
蘭15	杜㉗	
	杜㉚	
	杜㉟	

【蘭亭序】点の筆法　→ 蘭 5.0％　杜 8.1％

○「点は上にぬき捺は変じて点となる。」(36)　※強調部筆者

蘭12

喪［5］	杜⑥

【蘭亭序】右はらいの筆法　→ 蘭 20.0％　杜 27.0％

○「点は上にぬき捺は変じて点となる。」(36)　※強調部筆者

蘭12

杜19	杜㉕	杜㉘

蘭6	杜④	杜㉑
蘭10	杜⑤	杜㉖
蘭20	杜⑥	杜㉚
孔〈1〉	杜⑨	
孔〈2〉	杜⑪	
	杜⑮	
	杜⑳	

表7

「蘭亭序」「之」字の「捺法（右はらい）」に関しては、「**表6**」左側「蘭12」のように、右払いを点（止め）に転じる筆法が一定の割合存在する。これは、「杜家立成」にも共通する特徴である。また、「**表7**」右側のように、「蘭亭序」と「杜家立成」の右払いには、蔵鋒で右下方向に向かって運筆し、右払いを書く直前で筆を一旦休めた後、露鋒によって右払いを現わす筆法も存在する。さらに、「蘭亭序」においては、「**表7**」左側のように、右払いの収筆部で若干筆を戻して一呼吸置くといった、特徴的な筆法が確認できる。また、当該の筆法の「杜家立成」における比率は特に高い。

「蘭亭序」「之」字の二画め起筆部の筆法に関しては、「**表8**」冒頭に記載したように、「孔侍中帖」の起筆部に多出する、入筆した位置での動きを受けてそのまますぐに画を現わさず、入筆直後、若干右下方向に運筆する動きを伴った後で本来の画を書き始めるといった、特有な筆法の出現率が極めて高いことがわかる。好例が「蘭12」である。この筆法は、「杜家立成」においても高い割合で出現し、「杜家立成」での「之」字全体において半数近くの率を占める。

ここで、「喪乱帖」における「之」字に関しての考察に熟視してみると、「とくに「之」の字に注目すると、一行目の「之」（＝「**表3**」の［1］稿者注）と十行目の「之」（＝同［4］稿者注）では、書きぶり、字の大きさ、次字とのつながりなど、多くの点で違いがある。」(39)との指摘がある。さらに併せて、「蘭亭序」の「之」字に関する考察について傾注してみると、「十六行目の「之」（＝「**表2**」の10 稿者注）と十七行目の「之」（＝同12 稿者注）は字形や概形線の太さなどにおいて違いがみられる。同様に十八行目の「之」（＝同14 稿者注）と十九行目の「之」（＝同15 稿者注）でも字形は違っている。」(40)と言及される。

このように、「蘭亭序」を代表とする、王羲之作品（書法）の最大の特徴かつ魅力は、同一作品に同じ文字が複数回現れる場合に、対象となる全文字において自然な表現のうちに全て形を変え、しかも、それぞれの表情が多彩で豊かなことにある。「二」で既述のように、「蘭亭序」における最多文字「之」はその顕著な例とされる。

こうした特徴を有する中で、「蘭亭序」はじめ王羲之の作品において共通して高い確率で出現する筆法は、王羲之書法の特徴と判断できると考える。さらには、その特徴と同一の筆法が「杜家立成」において確認でき、また、その特徴は「杜家立成」での出現率が高い、ないしは一定の安定した確率にて現れることから、「杜家立成」の書法の源流には王羲之書法があると推考できる。しかも、「二」でまとめたように、「杜家立成」は、「書体や書風が中程で変化する」、すなわち、第一紙とその後では、同じ作品内においても書体や書風に変化が起こる作品である。「**表1**」に提示した「之」字が書

かれている行から明らかなように、王羲之書法と同一の特徴は、同じ一つの作品内で書体や書風が変容する「杜家立成」全般にわたって確認できる。このことは、「杜家立成」における王羲之書法の影響が、第一紙のみならず本作品全体にわたっていることの証左と捉えることができる。

表8

【蘭亭序】二画め起筆部の筆法　↓蘭 85.0%　杜 43.2%

○「(『孔侍中帖』は、稿者注) 筆を入れた位置からそのまま線を引かず、右下方向に運筆を行ってから本来の線を引き始めている。」(41)

○「『孔侍中帖』の始筆で見られた「右(下)方向に引っ張ってからの運筆」が「蘭亭序」でも随所に見られる。例えば、〔中略〕十七行目十字目「之」(＝12 稿者注) がその例である。」(42)

蘭1	蘭10	蘭19	杜②	杜㉒	杜㉞
蘭3	蘭13	蘭20	杜⑥	杜㉓	杜㊱
蘭4	蘭14	喪〔1〕	杜⑧	杜㉕	
蘭5	蘭15	喪〔2〕	杜⑬	杜㉖	
蘭6	蘭16	孔<1>	杜⑯	杜㉛	
蘭8	蘭17		杜⑰	杜㉜	
蘭9	蘭18		杜⑲	杜㉝	
蘭12					

まとめと今後の課題

「蘭亭序」において最も多く出現する「之」字は、その全字で表情を異にする二〇字二十面貌である傍ら、比較の対象とする作品、本論考では「杜家立成」での「之」字が王書と同一の多様な表現を高い割合で有するとの理由から、「杜家立成」が王羲之書法の影響のもとにあったと判断するのは拙速に過ぎ、本論考での検証のみを根拠に結論を導くのは浅慮であると考える。王羲之や光明皇后のみならず、国や時代等を問わず、能書において同じ文字を表出するにあたり筆脈に応じて字形や筆法を変化させ多彩に表現することは、作品執筆における自然な姿と推察できるからである。

一方で、「**はじめに**」他で既述の上了知しているように、一般的に、奈良朝の書は王羲之書法の影響を受けているとの前提がある。よって、王羲之書法が「杜家立成」に多大な影響を及ぼしている点はいまさら言うまでもない、むしろ当然の結果に認められるところでもあろう。

しかし、「**三**」における比較考察からは、王羲之書法が、「杜家立成」の第一紙だけではなく、本作品全体に大きな影響を与えている実情の一端を、改めて詳細かつ具体的に把握することができる。さらには、拙稿(1)で指摘したように、光明皇后の書法の根底には王羲之書法が存在し、その礎に則って自身の書法を築いた(43)との実態を確認できたとも捉えられる。

ただし、拙稿(1)には、「奈良朝における書法の趨勢は、すべて唐朝のそれに支配されるもの」(44)であり、「王羲之は確実な直筆がない以上、実質は伝王羲之の書跡であり、唐の能書家の欧陽詢、褚遂良の果した役割は想像以上に大きく、日本ではさらに大きな役割を果したと推察される」(45)との見解も抜粋した。大野氏は、「王羲之の書は当時既に確実な直筆はなく、梁代の搨模本を以て最高としているのであるから、その鑑定に当たった褚遂良が唐代に於いて、梁代の模本をもとに唐代搨模本の作制に関わったことは大いに考えられる。」(46)と指摘する。この点に関して掲げた「『杜家立成』への王羲之書法の影響について考察する際は、王書を忠実に臨書し再現した唐朝期の書人、特に褚遂良の存在とその書法についても視野に入れる必要があ」る(47)との課題に関して、本論考では未だ検証できていない。

本論考で考察対象とした「**表1**」の「杜家立成」「之」字には俯仰法が窺えるのも確かである。「杜家立成」における、唐代、特に褚遂良の書法の影響については新たな検討を要する。

なお、「一」の冒頭に記した「杜家立成」全文字にわたる考査結果とその検証考察に関しては、稿を改めて論述したい。

［注］

(1) 小林比出代「「杜家立成雑書要略」第一紙の書法分析 ―「楽毅論」との比較から―」『信州大学教育学部研究論集』第一〇号 二〇一七 pp. 1・20

(2) 以下、本書を「杜家立成」と略して示す。なお、『杜家立成雑書要略』は書巻であることから、本来は『』を用いるところだが、本論考では主に書作品としての見地から本書を考察するため「」を用いる。

(3) 拙稿(1)(＝前掲注(1))及び本論考でいう「第一紙」とは、「杜家立成」における最初の紙継ぎのところ(一行目(題目行)から一八行目)までを指す。

(4) 小林比出代「「杜家立成雑書要略」第一紙の書法分析 ―「楽毅論」との比較から―」(前掲注(1)) pp. 1・2

(5) 文末の「参考文献」一覧を参照のこと。

(6) 西一夫「正倉院蔵『杜家立成雑書要略』本文の配列 ―敦煌書儀との比較―」第二十五回信州大学国語教育学会発表資料 二〇一五 p. 1

(7) 『書道全集』第9巻 日本1 大和・奈良 平凡社 一九六五 p. 159

(8) 『書道全集』第9巻 日本1 大和・奈良(前掲注(7)) p. 160

(9) 小林比出代「「杜家立成雑書要略」第一紙の書法分析 ―「楽毅論」との比較から―」(前掲注(1)) pp. 2・13

(10) 山本佳代「光明皇后『楽毅論』の魅力」九州女子大学国語国文学会編『語学と文学』(30) 二〇〇〇

(11) 小林比出代「「杜家立成雑書要略」第一紙の書法分析 ―「楽毅論」との比較から―」(前掲注(1)) pp. 17・18

(12) 小松茂美『小松茂美著作集』第十五巻 日本書流全史一 旺文社 一九九九 pp. 144・145

(13) 小林比出代「「杜家立成雑書要略」第一紙の書法分析 ―「楽毅論」との比較から―」(前掲注(1)) pp. 18・19

(14) 余雪曼編『書道技法講座〈行書〉蘭亭叙』二玄社 一九七〇 p. 1

(15) 西村昭一「蘭亭叙」『中国法書ガイド15 蘭亭叙〈五種〉東晋 王羲之』二玄社 一九八八 p. 21

(16) 吉川蕉仙「蘭亭叙学習のウルトラC」「蘭亭叙」『中国法書ガイド15 蘭亭叙〈五種〉東晋 王羲之』二玄社 一九八八 p. 28, p. 31

(17) 西村昭一責任編集『ヴィジュアル 書芸術全集』第四巻 三国―東晋 雄山閣出版 一九九一 p. 109

(18) 筒井茂徳編『シリーズ書の古典7 蘭亭序二種 王羲之』天来書院 二〇一六 p. 16

(19) 『書道全集』第9巻 日本1 大和・奈良 平凡社 一九六五 p. 159

(20) 日本文化交流史研究会『杜家立成雑書要略 注釈と研究』翰林書房 一九九四 p. 201

(21) 日本文化交流史研究会『杜家立成雑書要略 注釈と研究』(前掲注(20)) pp. 240・241

(22) 高城弘一『楽毅論・杜家立成雑書要略 光明皇后』天来書院 二〇〇二 p. 30

(23) 大野修作「光明皇后『杜家立成』の原書写者は誰か ―日本奈良朝書道の基本―」『書法漢學研究』第3号 アートライフ社 二〇〇八 pp. 9・10

(24) 大野修作「光明皇后『杜家立成』の原書写者は誰か ―日本奈良朝書道の基本―」(前掲注(23)) p. 13

(25) 永田知之「『杜家立成雑書要略』初探 ―敦煌書儀等との比較を通して」高田時雄編『敦煌寫本研究年報』第三號 京都大學人文科學研究所 二〇〇九 pp. 37・38

(26) 丸山裕美子「敦煌寫本「月儀」「朋友書儀」と日本傳來『杜家立成雑書要略』―東アジアの月儀・書儀―」土肥義和編『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』東洋文庫 二〇〇九 p. 127

(27) 山中翠谷編『楽毅論・杜家立成雑書要略 光明皇后』天来書院 二〇一七 p. 39

(28) 下中彌三郎編『光明皇后 杜家立成雑書要略』(和漢名法帖選集 続 第3巻)

平凡社　一九三三　pp. 20・21

(29)『中国法書選12　王羲之尺牘集・上　東晋』二玄社　一九九〇　p. 59

(30)『シリーズ書の古典9　王羲之　喪乱帖　他』天来書院　二〇二一　p. 68

(31)『シリーズ書の古典9　王羲之　喪乱帖　他』（前掲注(50)）　p. 69

(32)中西慶爾編『中国書道事典』木耳社　一九八一　p. 271

(33)筒井茂徳編『シリーズ書の古典7　蘭亭序二種　王羲之』（前掲注(18)）　p. 16

(34)余雪曼編『書道技法講座〈行書〉　蘭亭叙』（前掲注(14)）　p. 6

(35)余雪曼編『書道技法講座〈行書〉　蘭亭叙』（前掲注(14)）　p. 25

(36)余雪曼編『書道技法講座〈行書〉　蘭亭叙』（前掲注(14)）　p. 51

(37)中村祐貴『「孔侍中帖」からみる王羲之行書　―「喪乱帖」「蘭亭序」との比較から―』（信州大学教育学部卒業論文）二〇一七　p. 25

なお、卒業論文に依拠する引用は、第三者に検証し難く、学術的論拠として一考を要するところである。しかし、当該の卒業論文は、本論考での検証考察に際して、王羲之行書書法の具体的な特徴を精緻に分析している点で先行研究としてふまえ、該当箇所を明示した方がよいと判断した結果、（当該論文の研究成果への敬意も含め）敢えて引用するに至った。

(38)余雪曼編『書道技法講座〈行書〉　蘭亭叙』（前掲注(14)）　p. 51

(39)中村祐貴『「孔侍中帖」からみる王羲之行書　―「喪乱帖」「蘭亭序」との比較から―』（前掲注(37)）二〇一七　p. 31

(40)中村祐貴『「孔侍中帖」からみる王羲之行書　―「喪乱帖」「蘭亭序」との比較から―』（前掲注(37)）二〇一七　p. 35

(41)中村祐貴『「孔侍中帖」からみる王羲之行書　―「喪乱帖」「蘭亭序」との比較から―』（前掲注(37)）二〇一七　p. 10

(42)中村祐貴『「孔侍中帖」からみる王羲之行書　―「喪乱帖」「蘭亭序」との比較から―』（前掲注(37)）二〇一七　p. 32

(43)小林比出代「「杜家立成雑書要略」第一紙の書法分析　―「楽毅論」との比較から―」（前掲注(1)）　p. 18

(44)小松茂美『小松茂美著作集　第十八巻　日本書道史展望』旺文社　一九九七　pp. 31・32

(45)大野修作「光明皇后『杜家立成』の原書写者は誰か　―日本奈良朝書道の基本―」（前掲注(23)）　pp. 12・13

(46)大野修作「光明皇后『杜家立成』の原書写者は誰か　―日本奈良朝書道の基本―」（前掲注(23)）　p. 11

(47)小林比出代「「杜家立成雑書要略」第一紙の書法分析　―「楽毅論」との比較から―」（前掲注(1)）　p. 19

［参考文献］　※「◎」の文献は本論考冒頭頁上段　本文13行め「諸文献」（注(5)）に該当する

◎内藤虎次郎「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」支那學社編輯『支那學』第三巻第一號　弘文堂書房　一九二二

◎内藤湖南「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」『研幾小録』弘文堂書房　一九二八

◎下中彌三郎編『光明皇后　杜家立成雑書要略』（和漢名法帖選集　続　第3巻）平凡社　一九三三

◎内藤湖南「正倉院の書道」小川晴暘編『正倉院の研究（上）』明和書院　一九四七

◎神田喜一郎「光明皇后の御書　楽毅論について」小川晴暘編『正倉院の研究（上）』明和書院　一九四七

◎西野貞治「光明皇后筆の杜家立成をめぐって」『萬葉』第二十六號　萬葉學會　一九五八

◎福井康順「正倉院御物「杜家立成」考」東方學會編『東方學』第17輯　東方學會　一九五八

◎『書道全集』第9巻　日本1大和・奈良　平凡社　一九六五

◎内藤虎次郎「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」『内藤湖南全集』第七巻　筑摩書房　一九七〇

○余雪曼編『書道技法講座〈行書〉　蘭亭叙』二玄社　一九七〇

○中西慶爾編『中国書道事典』木耳社　一九八一

◎蔵中進「正倉院蔵本『杜家立成』の本邦将来とその文学史的意義」神戸市外国語大学研究会『神戸外大論叢』第38巻2号　一九八七

◎西林昭一　杉村邦彦　浦野俊則編『歴代名家臨書集成　別巻・解説』柳原書店　一九八八

○西村昭一「蘭亭叙」『中国法書ガイド15　蘭亭叙〈五種〉東晋　王羲之』二玄社　一九八八

○吉川蕉仙「蘭亭叙学習のウルトラC」「蘭亭叙」『中国法書ガイド15　蘭亭叙〈五種〉東晋　王羲之』二玄社　一九八八

○『中国法書選12　王羲之尺牘集・上　東晋』二玄社　一九九〇

○西村昭一責任編集『ヴィジュアル　書芸術全集』第四巻　三国―東晋　雄山閣出版　一九九一

○西川寧『西川寧著作集　第七巻　雑纂二』二玄社　一九九二

◎日本文化交流史研究会『杜家立成雜書要略　注釈と研究』翰林書房　一九九四
◎古谷稔「〔光明皇后筆楽毅論〕」『日本名筆選』36　光明皇后　空海　最澄集　二玄社　一九九五
○『墨　特集　喪乱帖』124号　芸術新聞社　一九九七
◎山川英彦「杜家立成雜書要略注補」名古屋大學中國文學研究室編『名古屋大學中國語學文學論集』第10輯　一九九七
◎小松茂美『小松茂美著作集』第十八巻　日本書道史展望　旺文社　一九九七
◎小松茂美『小松茂美著作集』第十五巻　日本書流全史一　旺文社　一九九九
◎山本佳代「光明皇后『楽毅論』の魅力」九州女子大学国語国文学会編『語学と文学』(30)　二〇〇〇
○『墨　特集　王羲之蘭亭序』148号　芸術新聞社　二〇〇一
◎高城弘一『楽毅論・杜家立成雜書要略　光明皇后』天来書院　二〇〇二
◎大野修作「光明皇后『杜家立成』の原書写者は誰か　―日本奈良朝書道の基本―」『書法漢學研究』第3号　アートライフ社　二〇〇八
◎永田知之「『杜家立成雜書要略』初探　―敦煌書儀等との比較を通して」高田時雄編『敦煌寫本研究年報』第三號　京都大學人文科學研究所　二〇〇九
◎丸山裕美子「敦煌寫本「月儀」「朋友書儀」と日本傳來『杜家立成雜書要略』―東アジアの月儀・書儀―」土肥義和編『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』東洋文庫　二〇〇九
◎金文京「『杜家立成雜書要略』と唐代文学」中国文史研究会『中国文史論叢』二〇〇九
◎西一夫「『杜家立成雜書要略』の書儀的性格　―文体・表現・受容の観点から―」第三十四回和漢比較文学会発表資料　二〇一五
◎西一夫「正倉院蔵『杜家立成雜書要略』本文の配列　―敦煌書儀との比較―」第二十五回信州大学国語教育学会発表資料　二〇一五
◎馬駿「『杜家立成』における俗字の世界とその影響」李銘敬・小峯和明編『日本文学の中の〈中国〉』勉誠出版　二〇一六
○長尾秀則「王羲之「喪乱帖」考　―搨模と用紙の秘密を探る―」佛教大学国語国文学会『京都語文』(24)　二〇一六
○筒井茂徳編『シリーズ書の古典7　蘭亭序二種　王羲之』天来書院　二〇一六
○山中翠谷編『楽毅論・杜家立成雜書要略　光明皇后』天来書院　二〇一七
○中村祐貴『「孔侍中帖」からみる王羲之行書　―「喪乱帖」「蘭亭序」との比較から―』(信州大学教育学部卒業論文)　二〇一七
○『シリーズ書の古典9　王羲之　喪乱帖　他』天来書院　二〇二一

謝辞　本研究はJSPS科研費JP19H01230の助成を受けたものである。